

エッセイ

山里の風景、

そしてキツネと草花

高野 賢彦

地歴という言葉をよく聞くが、

僕は小学生のとき地理をものすごく好きだった。炬燵に当たりながら、あるいは日の当たる縁側に寝そべりながら日本と世界の地図帳を眺めていた。そのためか、国内の主な町や主要国の首都の地形図を覚えた。事、地理に関しては先より僕の方がよく知っていたから地理番というあだ名を付けられたが、どうしてそんなに地理が好きになったのか、その原因は今もわからない。

僕が生れ育ったのは甲府から河口湖へ抜ける峠の山村である黒駒であるが、それは縦が十二キロもある細長い村であり、とくに上黒駒は空が狭く、日照時間が極端に少ない谷間の集落であった。現にJR東海のリニア実験線は東のトンネルを抜けて谷間の空中を横切り、西のトンネルへ入るのだが、そこには僕の祖母の実家がある。

騒音で大変だろうと危惧していたが、実験段階ではどうやら杞憂におわっている。それは路線そのものがカバーで覆われているからである。ただ大自然のなかの化物のような光景は、駅が何十キロも離れている地元の役には立たない。

それに反して僕が住んでいた下黒駒は空が広く、しかも甲府盆地を一望することができる開けた地域である。戦時中の昭和二〇年七月六日の夜、甲府の町がB29に爆撃されたとき僕はその状況を高地から見つめていた。友人は戦火の下を死に物狂いで逃げまわっていたのに高台から見つめていたとはひどい、と言って未だに僕を責めている。その甲府のはるか西には三〇〇メートルの南アルプスが横たわっており、僕は小さいときからその山並みを見つめて大きくなった。

南アルプスは晩秋には真つ青の空の下に北から順に甲斐駒、鳳凰山、白根北岳、間ノ岳、農鳥岳、荒川岳、赤石岳などがずらりと並んでおり、その姿は空の青と山々の稜線の境目が見分けられないほど溶け合っている。冬にかけて山

の色が一層透明化するとき、降り積もった雪で稜線が明確になると、山並みの美しさが一段と増してくる。僕ら同級生は御坂中学校へ通うとき、いつもその美しい日々の模様を語りあったが、それは山並みが誰にも印象的だった証左である。

甲州は青天率がほとんど全国一、僕は秋から冬にかけて毎日、南アルプスを眺めていたが、それが夏になると雲が多くなつて山が見えない。そのうえ盆地ゆえに気温が上昇して蒸し暑くなり、そのなかでの麦の取り入れは苦しかった。それだけに待ちに待っていた秋、それも晩秋の稲刈りシーズンの爽快な気分は言語を絶する。みんな母が運んできたお茶を車座になつて飲みながら周囲の山々、東北方に見える大菩薩嶺、北の秩父山系の金峰山、そして頭を左に回して南アルプスの山並みを眺めながら談笑する楽しさは格別だった。ただ瑞牆山みずがきやまと八ヶ岳、それに背後の富士山が山陰になつて片鱗さえ見えないのが寂しかった。これほどの絶景のなかに住みながら、さらなる環境美を求めるのは贅沢というべきか。

次に山野の風景から離れて山国特有のキツネの話をした。冬の夜になると、父がしばしば子供たちにキツネの話を聞かせてくれた。その中身はキツネ火とキツネ憑きのことだった。まずはキツネ火の話からはじめよう。

キツネ火とはキツネが暗夜に口から吐く怪しげな火のことで、それは鬼火あるいは燐火とも言われた。村人が死去して土葬されると、その人の魂が空へ登つて行くという。そういうとき墓地で青い火がトロトロ燃えるというのが僕は火とキツネ現象に遭遇したことが一度もない。それがキツネ火の一つだというのが…。

また夕暮れに近隣の里山や遠く金峰山や大菩薩嶺など奥秩父などに伴つてか火が動くのがよく見えた。また遠くの山頂で提灯行列が行われているような光景もしばしば見えた。そして隣村の中川林というナラやクヌギの林、僕は高校時代の帰途にその林でしばしば昼寝をした。それは帰途が急坂なので自転車で一気に登ることができないので木陰で休んだのだが、夜にはその林で大きな弓張提灯が

動き回ったというのだ。

また父が現実に見た話であるが、金川という大河で橋がない場所を人間の三倍の歩幅で隣村の一ノ蔵という集落へ向かって急いでいる人がいた。父があまりの不思議さにじっと眺めていると、やがて件の人（キツネか）が持っていた提灯が身体の影になつて前後に動き、ますますスピードを上げて山裾へ走り去つたという。父はこれを明らかにキツネ火だというのだ。僕がそのような不自然な話は信じられない、ウソでしょう、と言うと父は学校帰りに自分が立ち止まり、この目で見たのだと言つた。そう言われると太刀打ちできず、信ずるしかなかつた。

次にキツネ憑きの話へ移ろう。わが家から二キロほど離れている山の裾野の古墳の上にある文殊稲荷大明神に関わる大正時代の奇怪な話を二件紹介したい。その前に今から二十年ぐらい前のことであるが、横浜のそごうデパートで奈良県桜井市の安倍文殊院の小さな展示が開かれた。僕はたまたま買い物にゆき興味を抱いたので立ち寄ると、安倍文殊院の快應執事長が「文殊とは陰陽師安倍清明の化

身であり、稲荷とは白ギツネで清明の母のことである」と教へてくれた。そこで僕はいつも肌身はなさず持つているわが家の文殊稲荷大明神のお札を見せた。すると執事長は「お稲荷さんはどこにでもあるが、安倍清明とその母が合体したお札は珍しい」と感心し、ついでに五方星芒のことを説明してくれた。

さてわが家のお文殊さんの奇怪な話に入ろう。まず一件目は村人が「山の神」の日の朝早くお文殊さんへ弓を引きにくくと、間口と奥行きがそれぞれ三十センチあるかないかの祠の中に妙なものが入っていた。よく見ると、女の着物の裾のようなものがはみ出していた。村人がそのことを父に知らせると、父は「そんなバカなことがあるものか」と思ったが、念のため村の駐在巡査と連れ立つてお文殊さんへ行くと、確かに女が祠に閉じ込められているようだった。

すると巡査がサーベルを抜き放つて祠の中を突くと、白くて太い足が二ユーとのびてきた。巡査は驚き、サーベルを身構えてヤーと叫びながら三、四メートル飛び退いた。巡査が女を祠から引きず

り出すと、それは花鳥という隣村の大人の女であった。女は祠の中で小便を漏らしていたので焚火をして乾かしてやり、事情を聴くとキツネに憑りつかれて祠へ引きずり込まれたと言うのだ。子供でも入れないほどの祠であるが、大人の女が入っていたとは・・・この話は集落の話題をさらつたという。

大体、寂しい山側の道は夜中に女が一人で歩くような所ではない。お文殊さんの辺りは人家まで少し離れている桂野という地域であり、甲府南方の市川大門町から上黒駒へ通ずる鎌倉街道の脇道なのだ。その山道は村人が奥山や里山から祖朶や材木を運び出すときに使う木馬道とつながっており、重油を塗つた枕木が敷かれて木馬が滑りやすくなっている荒々しい道であったが、子供たちにとっては早春の粘土質の道端に可憐なムラサキのスマレの花が咲いている懐かしい場所でもあった。しかし今は舗装されて周囲にモモやブドウの木が植えられ、日曜画家が遠くの間々や甲府盆地を描いている。世の中は信じられないほど変わった。

2件目は甲府市のはるか南の見知らぬ人が突然わが家へやってきて実は女房が近頃自分は黒駒のお文殊さんに憑りつかれていると言つて大騒ぎをし、暴れて困っている。なんとか取り鎮めてもらいたいと哀願した。父はまたもや「そんなバカな・・・」と思ったが、祠に閉じ込められた女もいたので仕方なく一緒にお文殊さんへ行つてアブラ揚げと御ひねりをあげてお参りをした。

すると一週間ほどして件の人がまた現れ、「おかげさんで女房が元通り静かになりました」と言つて赤飯を詰めた重箱を置いて帰つたというのだ。近年、このような奇怪な話はないが、父が言うにはお文殊さんは怖い白ギツネである。わが家では毎年二月の初午の日にお文殊さんのお祭りをし、大切にしている。

戦中戦後には黒駒ではどこの家でもヤギ、ヒツジ、ウサギ、ブタなどの家畜を飼っていた。そのため餌として与える草を刈らなければならぬが、村の内外どこへ行つても草が刈りつくされ、遠方まで出かけて行かなければならなかつた。わが家では戦後の一時期に乳牛を飼っていたので膨大な飼

料や草が必要だった。そのためし
ばしば8キロほど離れた上黒駒の
集落まで出かけ、カヤ、クズ、ヨシ、
アシなど刈った。兄と二人でリヤ
カーを押しながら砂利道の国道を
上ってゆき、口笛を吹き星空を眺
めながら真つ暗闇のなかを帰って
来た。しかし下り坂はスピードが
出るので僕が後ろでリヤカーを
引つ張っていたが、そういうとき
キツネに憑りつかれては困ると思
い、キツネが近寄らないように用
心して2メートルほどの竹の棒を
振り回した。

また当時は多くの家でニワトリ
を飼っていたが、そのニワトリが
しばしばキツネの餌食になった。
キツネがニワトリをくわえて山へ
持って帰るのは精々1羽か2羽で
あるが、キツネは残忍にも夜中に
鳥目で目が見えないニワトリを手
当たり次第かみ殺した。全滅だと
言つて嘆く声をしばしば聞いた。
キツネは夜中の何時頃、里に下り
て来るのだろうか。防御のため鳥
小屋の金網の裾を土中深く埋め込
むだけでは役に立たず、石の重し
を利かして深く埋め込む必要が
あった。

隣家でキツネを2匹捕まえた

いので見に行つた。柴犬より細
面で鼻先がとがっており狡猾そう
に見えた。ただ悪臭には閉口した。
また猟銃を持っている近隣の2人
がキジを撃ちに行くというので後
ろについていった。ケーン、ケー
ンという泣き声が聞こえても、犬
がブッシュや穴の中を探しても、
キジやヤマドリのは一向に見え
なかつた。ましてや穴からキツネ
が出て来ることはなかつた。昼、
キツネはどこにいるのだろうか。

次に草花について若干思つてい
ることを語ろう。美しい遠山の風
景を眺めながら、僕は野山に咲く
草花を見つめることが好きだつ
た。当時、山裾の小さな野原には
一面に芝草が生え、まだ幼いころ
芝生に寝そべつて空を眺めている
と、芝生の花芽が柔らかい頬の近
くにあり、顔を少しでも動かすと
チクチク触れた。この思い出は幾
つになつても忘れることはない。
また狭い野道ではリヤカーのわだ
ちと人が歩む所だけは裸の地面が
見え、そのほかは芝生とは全く異
なるオオバコなどの野草に覆わ
れ、その付近にはいろいろな草花
が咲いていた。

春のすこし湿っている道や野原

にはスギナが頭を出し、ゴギョウ、
ハコベラ、ナズナなどの七草が
青々と茂り、また乾いた所にはホ
トケノザや濃淡さまざまなスミレ
草が咲いていた。スミレはいつ見
ても愛らしい。そのほか忘れるこ
とができない草花は黄色のタンポ
ポである。その強靱で明るい生き
様からはいつも元気をもらつてい
た。そして素朴な野アザミやバラ
科のヘビイチゴの花も捨てがたい。

夏の草花ではなんといつても絶
品は山の谷間にひっそりと咲いて
いた大きなヤマユリである。僕は
その上品な姿を愛する。谷間のヤ
マユリではないが、毎年七月には
三浦半島の妙音寺を訪ね、境内の
土手をおおっているヤマユリを見
た。

秋の草花といえば僕はどうして
も母の名前と縁がある薄紫の野菊
をまつききに取り上げたい。それ
から真つ赤で人工的な印象さえあ
る彼岸花も好きだ。さらには故郷
の山道に咲いていたススキ、オミ
ナエシ、ワレモコウ、キキョウ、
ナデシコなども大好きだ。冬は野
道でも里山でも思い浮かぶ草花が
ない。強いて言えば草花ではない
が、風にふり落されまいと樹木に

しがみついているクヌギなど枯れ
葉が頭に残っている。以上

